

七、ナシヨナリズムの新しい展開

1 近代日本の思潮とその周期性

このところ百年間の日本人の思想の流れを顧みると、明治維新から当分の間は、開国進取の機運に乗って、文明開花の風潮が主流であったといえよう。それが日清戦争から日露戦争を戦った時期にきて、その開放的な思潮は、いつの間にか内向的な国粹主義にその主流の座を譲ってしまった。ところでその後、暫くの間大正デモクラシーの思潮が多彩な花を咲かせたかと思うと、昭和にはいつてからは再び軍国主義一色に塗りつぶされるに至った。昭和二十年の敗戦後の状況は、ここで説明するまでもないが、再び民主主義と平和主義を無条件に謳歌する時代であったのである。それは、まことに目まぐるしい開放と収斂の周期的な繰り返しであったといえよう。

林房雄氏は、かような事実を踏まえて、近代日本の思想的主潮の波長は、概ね二十年位で、面白いことには、民主主義と国際主義への外向的展開と、国粹主義と軍国主義への内向的収斂が、ほぼ二十年位の周期を以て交互に繰り返されておると観られておるのである。それは確かに歴史的な経過に支えられた説得力をもった歴史観であるといえよう。そういう観点から見ると、戦後永い間窒息の状態にあったナショナリズムを巡る論議が、今日盛況の兆を見せておることは、戦後における民主主義と国際主義の奔放な流れが、昭和四十年頃を境にして、再び内向的なものにその座を譲りつつあることを示すものだと見ることが出来る。尤もその動きもほぼ二十年位の波長をもつておるのであって、やがては次の開放的なものにその席を譲ることになるといわなければなるまい。

2 歴史の発掘とナショナリズム

確かに昭和四十年前後から、林氏が指摘されるように日本の出版界や演劇界では、歴史物が異常な勢いで取上げられかけた。NHKだけを見ても、徳川家康や上杉謙信、更に最近では伊達騒動が多くの特集を集めておる。このように民族の歴史を発掘しようとする風潮が強まることは、

その中に現在の意味と未来の展望を照明する光源をさぐるうとする意欲が強まったことを意味する。みずからがもてあます現在に不満を覚え、これからの未来に不安が強まり、その克服の道標を歴史の中にさぐり当てようとする焦慮がでてきたことの証左であろう。そしてその動きが因ともなり果ともなつて、日本人の間にナシヨナリズムを問題にする風潮が高まつてきたと見ることが出来る。しかも面白いことには、その歴史の発掘作業の中では、戦争物が意外に多く取上げられておることである。戦後の日本では、戦争はナシヨナリズムの昇華したものであるとして、戦争の歴史的な説明や評価をしようとする雰囲気さえ発見できなかった。また戦争を口にすること自体が、ナシヨナリズムと親しむ機縁になるものであり、従つてそれはタブーであるとさえされてきたのである。そして右も左も若者も老人も、あけて平和と民主主義を謳歌していたのである。ところが、今日、日本人が始めておる歴史の発掘作業の中では、戦争や武将の事蹟が取除かれるようなことはなく、むしろ、そうした戦争物が皮肉にも豊富に取上げられることになつてきておる。

3 ナシヨナリズムと各界の反応

つまり、この動きは、戦後のタブーを打破して、民族のあるがままの姿を掘り出そうとするものであり、この動きを通して、永い間眠りこけていたナシヨナリズムが、漸く生氣を取り戻しつ

つあるということが出来る。かかる思潮の変化を、学界も、教育界も、出版界も、演劇界も最早無視できなくなつたばかりでなく、むしろ進んでその風潮に適應する身構えをとるようになってきたのである。一時わが世の春を謳歌したいわゆる進歩的文化人と称せられる人々の論壇からの退潮が目立つてきた。今日、雑誌や新聞で健筆を揮つておるのは最早彼等ではなく、どちらかといえば現実主義者である。政界もまたその例外ではない。かかる風潮の変化に背を向けてかたくなにみずからの国際主義的な教条を守株してきた日本社会党は、救いようのない頽勢に追い込まれつつある。いち早く中共やソ連に対する隷従關係を断ち切つて、自主的な民族路線に変身した日本共産党は、着実にその地歩を固めつつある。創価学会に基盤をもつ公明党は、その古い教条を軸とする独特の規律と団結によつて、その勢力を庶民の世界に築き上げることに成功しつつある状況である。

次に、われわれが看過してはならない変化が大衆運動の中に起こつた。即ち、戦後の反米闘争は、当初いわゆる帝国主義と独占資本の打倒というイデオロギー闘争の性格をもつていた。そしてそれは多くの国民的エネルギーの結集に成功を収め、帝国主義と独占資本の元凶としてアメリカという国にそのほこ先が向けられていたのである。一九六〇年の安保闘争はそのクライマックスを記録した事件であつた。ところがその運動が、いつの間にか、民族の独立闘争の性格を強め

てきたのである。佐世保で展開された原子力空母エンタープライズの寄港反対闘争は、より広般な層の参加を得て、アメリカの力を象徴する旗艦の入港を前にして展開された。その運動は、最早イデオロギーの闘争といわんよりは、優勢なアメリカに対する劣勢な日本のレジスタンスという性格をもつに至った。これは既に、世界的に生彩と魅力を失いつつあったイデオロギーの呪縛から、日本自身が解き放たれようとするもがきと合流したもののようによに受取られたのである。ここにもナシヨナリズムの静かな復活が感じられるのである。その中に日本と日本民族の個性的な自覚を読み取ることができるからである。

4 経済成長とナシヨナリズム

一方、その間わが国の経済は、各種の条件に恵まれたとはいえ、世界最高の成長力を發揮してきたし、今尚その高い成長を持続してある。高い成長力は経済の急速な拡大を生み、日本経済の規模は、今や米国に次いで自由世界第二位の地歩を確立し、日本は今や堂々たる経済大国にのし上ってきた。このことは日本人のみずからの資質と能力に対する自信と誇りを強め、眠りこけていた日本のナシヨナリズムの覚醒を促すことになった。かようにその規模の拡大を見た日本経済

は、世界経済に大きい影響力をもつことになり、世界の注目をひくようになった。日本に関する研究や報道はいよいよ盛んになってきた。同時に、外国からの日本に対する要請も異常な高まりを見せることになった。そうしたことが日本人にはね返えつてこない筈はない。日本人のナショナリズムの意識はこのため激しく刺戟されるに至つた。

確かに日本の経済は、これまで世界最高の成長を記録してきた許りでなく、今後相当長期にわたつて高い成長をなしとげるであろう。實質一二%程度の成長が続けば、一九七五年の日本のGNPは四、〇〇〇億ドルにもなり、日本経済の規模は、英・独・仏・伊を併せたより大きくなるであろう。一人当たりの日本人の所得も欧州の水準を超えることになるであろう。そういうことになれば、経済大国としての自覚に芽生えた日本のナショナリズムは、いよいよそのよりどころをもつことになるであろう。外国の日本に寄せる期待や要請、更には批判が一段と高まりを見せることは、日本のナショナリズムの錬成に影響を及ぼすことになることも十分考えられることである。

5 ナショナリズムの展開の方向

以上は、戦後暫く萎縮しておつたナショナリズムの意識が、最近とみに復活乃至芽生えの様相を示し始めた二、三の例証である。しかし、それはいわゆるナショナリズム的な思潮がでてき

たことを示すものではあるが、それがどういう内容のものであり、どういう方向に展開しようとしておるものであるかは必ずしも明らかではない。ナシヨナリズムという以上は、民族の個人的な特長を明らかにするものでなければならぬと同時に、それがどういう方向にどういう展開を示すかも明らかでなければならぬ。ところが、日本の戦後ナシヨナリズムにおいては、そういった点が未だ明らかではない。われわれは、再び日本民族の歴史の発掘を始めた。そしてその発掘は、一部左翼の歴史家がするように一つの決まった鑄型にはめこむことで満足することはできなくなつた。もっと広く、もっと自由に、もっと大胆に、日本民族の核をその歴史の中から掘り当てたいという意欲が見えてきた。このことは、確かに健全な歩みであると思う。しかし、かくして折角掘り当てた核は、われわれの実践を通して、如何なる方向に仕向けられなければならないかについては、未だ十分な吟味がなされていないのである。歴史のない民族には未来がない。日本民族が、みずからの歴史と伝統に自覚と誇りをもつことは、未来を考える民族としていわば当然の道行である。問題は、歴史の発掘によって得たものの中味であり、否それ以上にその歴史の媒介によつて日本人のエネルギーがどういう方向に、どういう展開を示すかが問題であるといわなければならない。

然らば、その発掘作業の中から、何か意味のあるものを掘り当てることに成功したかといつて、

未だ十分そつであるとはいえないようだ。唯、一生懸命に発掘中であるというのが現実の姿であろう。例えば、これだけの経済成長をなし遂げた日本民族のもつ能力や、資質についての解明等は相当進んできたといえよう。共同の目的達成に示した日本民族の忠誠心、世界最高を記録した強い貯蓄性向、政府や企業に見られる優れた組織力等は、この成長をもたらした大きい原動力として自覚されつつある。勿論独創的技術力や金融力の劣勢、成長に伴う諸々のひずみに対する計画的な対応力の弱さ等も漸次あらわになってきた。なるほど光学機械や通信機器、更には造船や新幹線等に示されたわれわれの技術力は、相当高い評価に値するものであるが、その優秀さは未だ産業の一部に限られておるといえよう。従つて、日本のナショナリズムの差し当たつての課題は、先ず、われわれの民族のもつ能力に対する正当な評価を確立することではなければならない。メリットはメリットとして、デメリットはデメリットとして究明され、自覚されなければならない。そのことは、経済の領域においてのみならず、政治の世界においても、文化の領域においても均しく心掛けなければならない必須のことである。しかもその発掘作業は、今各方面で改めて手が染められておるところであり、われわれは、先ずこの作業を精力的に推し進めなければならない。みずからの主体的、個性的な能力の特長とその限界に盲目であつては、健全なナショナリズムの育成は覚束ないからである。われわれの文化には勿論、独特の特長がある。しかし壮大な

構図と独創力の不足は、西欧世界との接触を通してわれわれがみずからの文化の世界に常を感じてきたことであつた。政治の面においては、問題は一層複雑で困難である。これまで日本民族がアジアにおいて、更には世界に向つて、一体何をなし何をなさなかつたか。またわれわれが日本民族を政治的に組織する上において、どの点が有能で、どの点が無能であつたか。そうした事蹟を余すところなく究明し、公正に説明することが要求されるのである。そうすることによつて、初めて、ナシヨナリズムの展開の方向とその方法が割り出されるからである。

6 ナシヨナリズムの展開状況

然らば、戦後におけるナシヨナリズムの展開状況は果たしてどうであつたか。先ずその内政的展開を顧みたいが、正直にいって、未だその展開らしい展開は見られていないといつてよい状況である。申すまでもなく、戦後の日本は、ナシヨナリズムの窒息期ともいうべき時期であつてナシヨナリズムを口端にのせることさえはばかり勝ちの時代であつた。そうしたナシヨナリズムに對する拒否反応ばかりでなく、進んでナシヨナリズムこそは日本を戦争に追い込んだ元凶であり、その息の根をとめることが、新生日本の任務であるとさえいわれた時代であつた。確かにそうし

たことは、敗戦の反動でもあり、行き過ぎであったにちがいないが、未だその呪縛から十分に解放されておるとはいいい難い状況である。

しかしながら、手放しの国際主義的風潮に対するレジスタンスは、公私の生活の各分野に根強く生き残つておつた。それはナショナリズムの積極的な展開というものではなく、むしろその消極的なそれであつた。即ち、レジスタンスとしてナショナリズムが作用したのである。むしろ、戦後の内政上の出来事は、その多くが開放的な手放しの国際主義、民主主義に対するレジスタンスの性格をもつていたといえよう。僅かに、建国記念日の制定が遠慮勝ちに実現されたり、国歌の合唱や国旗の掲揚が漸次普及したりしたことは、緩慢ではあるが、その積極的な展開であるかのように見えるが、それらとても、実は、レジスタンスの域を出たものではなかつた。従つて、われわれの当面の仕事はナショナリズムの性急な展開を急ぐことではなく、もっと冷静に、もっと克明に、日本民族の歴史的实践を究明し、それを学問的に掘り下げる作業であらう。他の民族におけると同様に、日本民族の实践の生んだ果実は、美しいものもあれば、醜いものもあらう。軽率で愚昧なものもあれば、慎重で賢明なものもあらう。虚飾や偏見を交えず意地や誇張を退けて、みずからの歴史の中にみずからの姿を探究することである。その作業を通して、日本の民族は、その民族的骨格を強靱なものにし、その民族的性格に洗練の度を増し、健全なナショナリス

ムの成育と展開を促すことになるからである。

外交面におけるナシヨナリズムの展開には、更に見るべきものをもっていないといえよう。勿論、占領軍に対するかすかな抵抗はあったが、それは恐らく安易な迎合よりは乏しかったといわねばなるまい。国際社会への復帰はアメリカの世界政策の袖にかくれたものであった。その後の国際状況の活動も、アメリカの背中を見て歩いたようなものであったといわざるを得ない。

ところが、先にも述べたように、日本の経済が成長と拡大を記録し、日本はいつの間にか経済大国にのし上がった。世界は改めて日本を問題にしはじめた。当のアメリカ自体が日本を有力な競争者として意識しはじめた。日本の経済成長は、中ソの革命に匹敵する程の世界史的出来事であるという人さえ出てきたのである。日本は漸く、みずからの問題をみずからの力量で解決するよう期待され、日本みずからもそれを自覚しはじめたといえよう。かくして日本は、みずからの力量を計量しはじめ、みずからの限界を意識しはじめたのである。日本のナシヨナリズムが国際的試練を受ける厳しい時代が否応なしに目の前にきたのである。

これまで日本の安全に責任をもってくれたアメリカは、そのアジア政策を練り直そうとしつつある。イギリスはスエズ以东からその軍事力の引揚げを既に決定した。貧困と混迷の中にあるアジアは、欧米勢力の羈絆を脱して、険しい自立の道を切り開いて行かねばならなくなった。アジ

アの諸国民の目は改めて日本に向けられてきた。しかも、日本に対するアジア諸国民の過去の怨憎は未だ消えていないし、日本の今日の繁栄に対するジェラシーと期待はいよいよ高まりつつある。果てしない混迷と根深い違和感の中にあつて、日本のナショナリズムは、その真価を問われようとしておるのだ。日本のナショナリズムは、如何なる方向に如何なる方法を以てこの事態に対処しようとするのか。それがわれわれの今日の課題である。

しかし、日本は日本であつて、それ以外のものではない。日本の力量でできることは果敢にこれを実行しなければならぬが、日本の力量を超えたことはやろうとしてもできるものではない。といつてわれわれは、独り得々としてその成長を誇り、その繁栄を享受するべきではない。われわれは、みずから節度のある生活に甘んじつつ、われわれのもつ可能性は最大限にアジアのために絞り出さねばならない。しかもそれは、われわれのアジアに対する厳肅な責任であつて、そのためにもわれわれがアジア諸国に恃むところがあつてはならない。それこそは単にわれわれのアジアに対する過去の贖罪に留まらず、これからのアジアの平和と安定に不可欠の礎石であり、それが日本自体の生存と安全に通ずる大道であるからだ。日本のナショナリズムは、この試練と責任に耐えてはじめて、その声価と信用を世界に問うことができるのである。